

平成24年度「もっと現場を知る！職員短期派遣研修」報告書
特定非営利活動法人 斐伊川流域環境ネットワーク（通称 斐伊川くらぶ）

総務部人事課 石井康朋、伊藤真紀

1 研修先について

斐伊川くらぶは、斐伊川流域の環境保全と地域の活性化を目指して、平成10年より活動されている。主な実施事業は以下の通り。（斐伊川くらぶHP <http://fish.miracle.ne.jp/hiikawa/index.html>）

- ①「宍道湖 ヨシ再生プロジェクト」 平成13年から継続している、宍道湖にヨシ原を復元し、水質浄化機能や生態系保全機能を再生するため、竹ポットを用いてヨシ植栽する事業。6～9月に宍道湖・中海周辺の小学校で竹ポットづくり及び環境学習会を実施し、9月下旬に学習会参加児童を中心に関係者および支援者が宍道湖岸へ一堂に会して植栽を行う。ヨシ植栽用竹ポットは、斐伊川くらぶ小谷武会長が特許取得されている。
- ②「尾原ダム どんぐりの森づくり」 ダム建設によって削られた山肌の緑を復元するため、斐伊川流域の小学生が拾い集めたどんぐりを自作した竹ポットに植え、育った苗木を竹ポットごと植え付ける事業。
- ③「八束・花と緑の島づくり」 地元の小中学生を主体に、1,000本の桜植樹と菜の花、水仙を植栽する事業。

いずれの活動も、地域の住民、行政、企業が連携協働して、自分たちの手で環境を保全し、次世代へ受け継いでいくことを主眼としている。その中心には、常に子供たちが主役として位置付けられている。

2 研修日程、内容

今回の研修では、上記①「宍道湖 ヨシ再生プロジェクト」に参加させて頂いた。

小学校における竹ポットづくり学習会は、6月12日、6月22日、7月29日、9月6日の計4回、竹ポットづくりの指導補助として参加させて頂いた。小学生が鉋や電動ドリルを使用して竹材を加工するのを、安全を確保しながら補助した。

小学校における竹ポットづくり学習会予定表（総合的な学習の時間、計90分）

- | | |
|-----|---------------------------------------|
| 5分 | 活動説明：宍道湖の水浄化とヨシ植栽の必要性について |
| 1分 | シジミ浄化力実験：水槽（シジミ入、対照）へ米粉を投入 |
| 40分 | 製作体験：ヨシ植栽用竹ポットづくり、どんぐりポットづくり |
| 5分 | 宍道湖の水循環について：太陽光発電を使った水循環装置 |
| 12分 | ヨシ利用学習：ヨシ皿製作実演 |
| 2分 | シジミ浄化力観察：シジミ入水槽と対照水槽を比較 |
| 25分 | 意見交換：児童から感想発表・質疑応答、森の大切さと森林の水源涵養力について |



宍道湖の水循環を勉強



竹ポットづくりのお手伝い

9月28日のヨシ植栽イベントは、指導スタッフおよび記録係として参加させて頂いた。今年から市民活動として、参加者1,200人の盛大なイベントとなった。

3 感想

9月28日のヨシ植栽イベントに参加してからというもの、会場だった辺りの近くを通る度に、植えたヨシが気になってチラチラ目を向けるようになった。ところが、(今回初めて知ったのだが)ヨシの成長は驚くほど遅い。昨年植えられた区画はまばらに生えているだけでいかにも寂しいし、2年前の区画でさえまだ砂地の方が目立つ。これではいつになったら水質浄化作用を発揮してくれるのかと、じれったくなる。



快晴でした



植栽する小学生たち

しかし、こうした目で宍道湖を見るようになったということは、宍道湖の水質環境を身近に意識するきっかけになったのかもしれない。もちろん今までも、宍道湖の環境が改善してくれることを人並みに願っているつもりでいた。松江市に住んでいるので、湖岸の風景は見慣れていたし、シジミも好物であり、また今夏のようにアオコが大発生すればあの独特の臭気が我が家を直撃したりもする。それでも、環境改善に自分が直接何らかの働きかけをすることがあろうとは、思ってもみなかった。

自分が作った竹ポットを使って、宍道湖に自分でヨシを植えた。その体験をした大勢の子供たちは、いつまでも、植栽地の近くを通る度に、自分が植えたヨシの成長が気になることだろう。その気持ちが、宍道湖をきれいにしようという思い、さらには郷土への愛着となって、根付いていくのではないだろうか。



1,200本植えました



植栽2年目のヨシ

実際に体験してみると、砂浜に穴を掘って竹ポットを植え付けるのは、大変な作業だった。たちまち水が湧き出て、掘っても掘ってもすぐに穴が崩れてしまう。実は、小学生の植え付けでは深さが十分でないことが多いので、後で人知れず斐伊川くらぶのメンバーが植え直しておられる。これは大変な重労働である。ヨシを植えることだけが目的なら、最初から大人だけで植えた方が手っ取り早いだろうし、もっと言えば建設機械を使って一気に効率的に済ますことだってできるはずだ。しかし、それでは子供たちが宍道湖に関心を持つきっかけにはならない。自分の手で植えたという実感と愛着にこそ意味があるのだ。

メンバーの皆さんはイベント後も、子供たちが見に来た時に自分の苗が枯れていてガッカリしないようにと、たびたび見回りして枯れたら植え替えるなど、陰ながらヨシの世話を続けられるのだと聞いた。子供たちの思いを大切に育むために、つまりは島根の未来を育むために、地道な努力を続けておられるのだと思った。

最後になりますが、この度の研修を快く受け入れて頂きました斐伊川くらぶの皆様へ、厚くお礼を申し上げます。ありがとうございました。

以上